日本國天皇家論
章　上宮聖王

日本國天皇実伝

日本國天皇家

古代の大阪・奈良には神武を始祖とする九州天皇家と異なる国家が存在した。六世紀末から七世紀初頭、その國の王は「上宮太子（日本書紀）」「上宮法王（法王帝説）」「上宮法皇（法隆寺釈迦三尊光背銘）」と記された偉大な王であった。では、この国家は何という国号であったのか。日本書紀、万葉集からその国号を読み取ることができる。

国号は日本國

是の時に當（あた）りて、高麗の僧慧慈、上宮皇太子薨（かむさ）りましぬと聞きて、大きに悲しぶ。皇太子の為に、僧を請（ま）せて設齋（をがみ）す。仮（よ）りて親ら経を説く日に、誓願ひて曰く、「日本國に聖人有す。上宮豊聡耳皇子と曰す。固（まこと）に天に縦（ゆる）されたり。玄（はるか）なる聖（ひじり）の徳（いきほい）を以て、日本の國に生（あ）れせり。三統を苞（つつ）み貫（ぬ）きて、先聖の宏猷（おほきなるのり）に纂（つ）ぎ、三宝を恭（つつし）み啓（いやま）ひて、黎元（おほみたから）の厄（たしなみ）を救ふ。是實の大聖なり。今太子既に薨（かむさ）りまぬ。我、國異なりと雖も、心断金（うるはしき）に在り。其れ独り生くとも、何の益（しるし）かあらむ。我来年の二月の五日を以て必ず死らむ。因（よ）りて上宮太子に浄土に逢ひて。共に衆生を化さむ」といふ。是に、慧慈、期（ちぎ）りし日に當（あた）りて死る。是を以て、時の人の彼も共に言はく、「其れ独り上宮太子の聖にましますのみに非ず。慧慈も聖なりけり」といふ。　（日本書紀　推古天皇）

高麗僧、慧慈がその死を悲しんだ「上宮豊聡耳皇子」とは、622年2月22日に亡くなった上宮法王である。法王は関西に実在した国家の國王であった。この高麗僧がその國を「日本國」と呼んでいる。

日本國に聖人有す。
固（まこと）に天に縦（ゆる）されたり。玄（はるか）なる聖（ひじり）の徳（いきほい）を以て、日本の國に生（あ）れせり。

高麗僧、慧慈は上宮太子の生まれた國を「日本國」と呼んでいる。この「日本國」は、現在のように日本全体をさしたのではないが、当時、静岡以西の日本列島をほぼその影響下に入れていた支配国家であった。その首都は、大阪の「難波宮」、奈良の「藤原京」だった。高麗僧、慧慈が「日本國」と呼んだのは、古代奈良、古代大阪に栄えた古代国家である。現在、奈良、南大阪に残された多くの古墳はこの日本國のものである。

日本國の偉大な王が「上宮太子」と呼ばれた王であった。上宮太子は日本國に仏教を導入し、元号を「法興」と定め、飛鳥に法興寺を建造した王であった。

故に、法師であった高麗僧、慧慈は、「三宝を恭（つつし）み啓（いやま）ひて、黎元（おほみたから）の厄（たしなみ）を救ふ。是實の大聖なり。」と賛辞を贈ったのである。その王が生まれた國が日本國である。慧慈は高句麗の僧侶で、高句麗の人々は上宮太子の國を日本國と呼んでいた。日本國という国号は、当時の極東アジアでの通り名であった。推古紀に記載されている「日本國」は九州天皇家が統治した國ではない。当時、神武

江お始祖とする天皇家は北九州に存在した。列島の支配者は日本國であった。

天智紀の「日本」

今聞く、大日本の救将廬原君（いほはらのきみ）臣、健兒萬余を率て、正に海を越えて至らむ。

百済王の言葉である。660年、唐は水陸13萬の軍と新羅軍5萬で百済を攻め平定した。百済義慈王は捕虜となり京に送られ、百済は滅亡する。百済遺臣は「日本」に居た「豊璋」を王位につけて再興をはかる。その翌年3月陸軍2萬7千の兵を百済救援のため派遣したと日本書紀は書いている。この2萬7千の軍勢は百済軍と共に新羅と戦うが、百済王・豊璋は重臣福信を切るなど乱れ、新羅に「州柔」を攻め落とされそうになる。その時に豊璋が兵士を鼓舞して朗報を伝えたのが、この文である。

豊璋は「大日本から、健兒萬余がやってくるぞ」と、述べ、味方を鼓舞した。百済王は、援軍を「白村江」で迎えようとしたが、「白村江」にはすでに唐・新羅が堅陣を築いていた。この時、唐は日本からの百済援軍の情報を手に入れていて迎え撃ったのであろう。「日本の健兒萬余」とは九州天皇家の軍隊ではない。百済王が「大日本」と認識していた國は、「日本國」であった。

又日本の、高麗を救う軍将等、百済の加巴利濱に泊りて、火を燃く。灰変りて孔に為りて、細き響きある。鳴鏑の如し。或（あるひと）の曰はく、「高麗・百済の終に亡びむ徴（しるし）か」といふ。

高句麗を助けるために出兵した「日本」の軍が百済の「加巴利濱」に滞在したときの説話である。660年、百済を平定した唐は次に高句麗を攻めた。翌年、翌々年も攻めるがが成功しない。この時、高句麗は「日本」に援軍を求め、日本國は高句麗に援軍を派兵した。622年「白村江」の前に、日本國は高句麗に援軍を派遣した。その時の変事を見て、百済人が言った言葉を日本書紀は残している。高句麗救援のために出兵したのも日本國であった。

夏四月に、鼠、馬の尾に産む。釈道顕占ひて曰く、「北国の人、南国に附かむとす。蓋し高麗破れて、日本に属かむか」といふ

高句麗の僧、釈道の言葉である。唐の攻撃の前に、高句麗は敗れて、日本に属することになるだろう、と占った。いずれも、百済人、高句麗人の日本認識である。「日本」とは、関西の列島支配国家である日本國である。
この時、九州天皇家は自らを「倭（やまと）の國」と名乗っていたが、これは国号ではない。「日本」とは「百済」「高句麗」「新羅」と同じように、国際的に知られた国号であった。「日本」という国号で百済・高句麗に知られていた國は、藤原京を首都とした日本列島の支配国家、日本國である。

二十四日に、日本の船師、及び佐平余自信・達率木素貴子・谷那晋首・憶禮福留、併て国民等、弖禮城に至る。明日、船發ちて始めて日本に向ふ。

白村江の敗北後、百済王族の亡命記事である。ここには、「始めて日本に向ふ」と書いている。百済の王族は日本に亡命することになった。大阪市東住吉区には「百済」の地名が残る。白村江敗戦後、百済王家、「善光」は、難波(大阪市天王寺区堂ケ芝・百済寺跡と細工谷・百済尼寺跡)に住んだ。 以後、百済王として優遇され、百済人が、「善光」を頼って続々と亡命してきた。それでこの一帯が「百済」と呼ばれるに至ったという。
「日本」とは九州天皇家ではない。関西の日本國天皇家である。

百済本記の「日本」

25年（531）春二月、天皇、病甚し。7日に天皇、磐余玉穂宮に崩りましぬ。時に年82。冬12月の5日に、藍野陵に葬りまつる。 （日本書紀継体紀）

日本書紀の継体天皇の死亡記事である。次のような後注があり、その中で、百済本記に言及している。

或本に云はく、天皇、28年次甲寅に崩りましぬといふ。而るを此に25年次辛亥に崩りましぬと云へるは、百済本記を取りて文を為れるなり。其の文に云へらく、太歳辛亥の3月に、軍進みて安羅に至りて、乞屯城を営る。是の月に、高麗、其の王安を殺す。又聞く、日本の天皇及び太子・皇子、倶に崩薨りましぬといへり。此に由りて言へば、辛亥の歳は、25年に當る。後に勘校(かむがへ)む者、知らむ。

誠に奇妙な後注である。継体天皇が死んだのは、或本では「28年(甲寅)」なのだ、が、「百済本記」には「25年(辛亥)に日本の天皇及び太子・皇子が倶に死んだ」と書かれている。この後註は、継体天皇が崩御した年については二つの記録が残る。一つの記録は、「28年次甲寅」で、もう一つの記録は、「太歳辛亥の3月」である。この二つの記録のどちらをとるか。日本書紀編纂者は、「百済本記」の記事をとって、「継体天皇は、28年ではなく、25年に死んだ」と、記したのだ、という後注である。

百済本記は、日本國天皇家の記事である

(1)　百済本記の「日本國天皇家の天皇、太子、皇子」の死亡記事

太歳辛亥の3月に、軍進みて安羅に至りて、乞屯城を営る。是の月に、高麗、其の王安を殺す。又聞く、日本の天皇及び太子・皇子、倶に崩薨りましぬといへり。　　(百済本記)

百済本記は、「日本の天皇・太子・皇子が共に亡くなった」と、記している。この「日本」とは当時、奈良、大阪に存在した日本國である。そして、日本國の王も「天皇」と呼ばれている。つまり、日本國には天皇制が存在した。日本國の王は「天皇」と呼ばれ、後継者は「太子」と呼ばれ、子どもは「皇子」と呼ばれていたのである。百済本記が記録した日本國天皇の死は「辛亥(25年)」である。これは西暦531年に当たる。

この百済本記について、「頭注11」は、喜田貞吉の見解を載せている。

喜田貞吉は、この記事には太子・皇子の薨去と見えていて皇后・孺子とは食い違うし、合葬は必ずしも同時の死は意味しないとして反対し、百済本記の記事は、継体崩御に際して、皇室内に何か重大な事変が起こったことを示しているとした。

喜田は、百済本記のこの記事を、九州天皇家の記事と読んでいる。そうした読みは、喜田だけではなく、ほとんど全ての研究者の読みでもある。だが、25年(531年)に、天皇一族が亡くなったという大事件は、百済本記以外の史料のどこにも記載されていない。従って、喜田貞吉は、継体天皇が崩御して、皇室内に何か重大な事変が起こったのだろうと想定するしかなかったのである。しかし、この想定は外れている。百済本記の記事は九州天皇家に関する記事ではなく、日本國天皇家に関する記事である。百済本記は、九州天皇家の継体天皇の死を記録したのではなく、日本國天皇家の天皇とその一族の死を記記録したのである。

百済本紀の記事は、日本國天皇家に関する記事である。この問題は継体陵にまで係わる。宮内庁は、「太田茶臼山古墳(大阪府茨木市)」を継体陵としている。だが、最近の研究では、「今城塚古墳(高槻市)」が真の継体陵ではないかと云う。1997年から2006年にかけた高槻市教育委員会の発掘調査は次のように報告している。

この陵の築造時期が、継体の没年25年(531)と一致することが確実となった。

今城塚古墳の築造時期が百済本紀に記載された天皇の没年、辛亥25年(531)と一致した。この結果、今城塚古墳の被葬者は、百済本記が531年に亡くなったと記した天皇であるといえる。だが、この天皇とは九州天皇家の継体天皇ではない。日本國天皇家の天皇である。今城塚古墳は日本國天皇の陵である。大阪南河内、および、奈良各地に存在する古墳と同じく、日本國天皇の古墳である。

(2)　「或本」は九州天皇家の本

或本に云はく、天皇、28年次甲寅に崩りましぬといふ。

「或本」は九州天皇家の継体天皇に関するものである。この本では、九州天皇家継体天皇は、その28年に亡くなったと記録されていた。継体28年は西暦では534年である。継体紀編者は、継体紀作成のため海外の史料を含め様々史料を読んでいた。継体の死亡実年が明確ではなかったのであろう。「或る本」では534年と記録されていた。ところが、百済本記では531年である。どちらを採用すべきか。結果、百済本記の死亡年を採用した。しかし、この選択はまちがっていた。九州天皇家の継体天皇の死亡は「或る本」の如く、534年であった。

日本書紀は、継体天皇が25年（531年）に亡くなったと記載したが、同時に、皇太子や皇子も亡くなったとは記載しなかった。百済本記は、531年に天皇も皇太子も皇子も亡くなったと記録していたが、日本書紀編者は百済本記の記事を全て採用したのではない。ただ、天皇の死亡記事のみ書いた。その理由は明らかであろう。九州天皇家の継体天皇が亡くなった時、皇太子も皇子も同時に亡くなるという、「大事件」はなかったからである。

古事記、継体天皇は九州天皇家の天皇である

品太王の五世の孫、袁本杼命、伊波禮の玉穂宮の座しまして、天の下治らしめしき。天皇、三尾君等の祖、名は若比賣を娶して、生みませる御子、大郎子。次に出雲郎女。又尾張連等の祖、凡連の妹、目子郎女を娶して、生みませる御子、廣國押建金日命。次に建小廣國押楯命。又意祁天皇の御子、手白髮命を娶して、生みませる御子、天國押波流岐廣庭命。又娶息長眞手王の女、麻組郎女を娶して、生みませる御子、佐佐宜郎女。又坂田大俣王の女黒比賣を娶して、生みませる御子、神前郎女。次に田郎女。次に白坂活日子郎女。次に野郎女、亦の名は長目比賣。又三尾君加多夫之妹、倭比賣を娶して、生みませる御子、大郎女。次に丸高王。次に耳上王。次に赤比賣郎女。又阿倍之波延比賣を娶して、生みませる御子、若屋郎女。次に都夫良郎女。次に阿豆王。此の天皇の御子等、幷せて十九王なり。此の中に、天國押波流岐廣庭命は、天の下治らしめしき。次に廣國押建金日命、天の下治らしめしき。次に建小廣國押楯命、天の下治らしめしき。次に佐佐宜王は、伊勢神宮を拜きたまひき。此の御世に、竺紫君石井、天皇の命に從はずして、多く禮无かりき。故、物部荒甲の大連、大伴之金村連二人を遣はして、石井を殺したまひき。
天皇の御年、肆拾參。丁未年四月九日崩也。御陵は、三嶋の藍の御陵なり。

古事記の継体天皇は九州天皇家の継体に関する伝承である。皇子、皇女は合わせて19人いた。

此の中に、天國押波流岐廣庭命は、天の下治らしめしき。次に廣國押建金日命、天の下治らしめしき。次に建小廣國押楯命、天の下治らしめしき。次に佐佐宜王者、伊勢神宮を拜きたまひき。

皇子の中で、廣國押建金日命は安閑天皇、建小廣國押楯命は宣化天皇、天國押波流岐廣庭命は欽明天皇となった。また、佐佐宜王は伊勢神宮を造った。
九州天皇家継体天皇は、「丁未年四月九日」に亡くなったが、継体の皇子三人は天皇となっている。百済本記の天皇は皇太子・皇子も同時に亡くしている。廣國押建金日命は「勾之金箸宮」で政権と執った。「箸」とは、橋のことであろう。「勾之金」という珍しい宮の名前は、香春町に地名として残っている。

古事記の伝承では、継体天皇は「近淡海國」の出身である。

天皇（武烈）既に崩りまして、日續知らすべき王無かりき。故、品太天皇の五世の孫、袁本杼命を近淡海國より上り坐さしめて、手白髮命に合せて、天の下を授け奉りき。

九州天皇家継体天皇は、近淡海國から都へ上り、仁賢天皇の娘と結婚して天皇となった。近淡海國とは小倉南区長野である。小倉南区長野には景行天皇が宮を造り、晩年を過ごした。その子、成務天皇もこの宮で天の下を治めた。以来、九州天皇家の都の一つであった。継体天皇はここに居たのである。継体天皇は品太王（応神天皇）の五世の孫という。応神天皇の古事記説話にも、「近淡海國」が登場する。

一時、天皇（応神）近淡海國に越え幸でましし時、宇遲野の上に御立ちしたまひて、葛野を望けて歌曰ひたまひしく、

千葉の　葛野を見れば　百千足る　家庭も見ゆ　國の秀も見ゆ

とうたひたまひしき。故、木幡村に到り坐しし時、麗美しき嬢子、其の道衢に遇ひき。爾に天皇其の嬢子に問ひて曰りたまひしく、「汝は誰が子ぞ。」とのりたまへば、答へて白ししく、「丸邇（わに）の比布禮の意富美（おうみ）の女、名は宮主矢河枝比賣ぞ。」とまをしき。

(1)淡海とは小倉南区曽根の干潟の海である。九州天皇家の「近江（淡海）」とは小倉南区である。
(2)小倉南区は九州天皇家の都の一つであった。景行天皇、成務天皇の宮があった。人麿の歌で有名な「近江大津宮」も小倉南区にあった。
(3)応神天皇が名前を尋ねた美しい娘は「丸邇（わに）の比布禮の意富美（おうみ）の女」と答えた。「丸邇（わに）」は、出雲神話の「因幡の白兎」に登場する「ワニ」であろう。「ワニ」とは小倉南区の豪族、「丸邇（わに）」一族をいう。「意富美（おうみ）」とは、「淡海」である。小倉南区、曽根干潟の海、淡海である。

応神天皇の五世の孫、継体天皇は小倉南区にいた。古事記は九州天皇家、継体天皇の実録である。

日本書紀、継体は日本國天皇

九州天皇家の継体天皇は一人で亡くなり、子どもたち三人は何事もなく、次の天皇となり天の下を治めた。古事記継体には説話はなく、日本書紀継体の記述と比較検討しようがないが、日本書紀編者は百済本記の日本國天皇の死亡記事を参考にして、九州天皇家継体の没年を531年とした。しかし、この没年は日本國天皇の没年であって、九州天皇家継体の没年ではない。

日本書紀継体天皇は九州天皇家継体天皇紀ではなく、日本國天皇家の史実である。

3月に、伴跛、城を爾須比に築きて、満奚に連け、烽候・邸閣を置きて、日本に備ふ。

この日本も古代奈良、古代大阪に栄えた日本國である。伴跛は、日本國からの侵攻に備えて築城したという。この記事から察すると、当時、百済と日本國は交戦状態にあったと思われる。日本國の侵略に備えて、「伴跛」側の築城記事が掲載されていた。ところが、この日本國の天皇が亡くなった。侵略の危機はひとまず去った。故に日本國天皇の死亡記事を残したのである。

古代奈良に実在した日本國天皇家

(1) 古代飛鳥・大阪には高句麗・百済・新羅から、「日本」という國号で呼ばれた古代国家が存在した。
(2) 日本國の王は天皇と呼ばれていた。日本國天皇家が存在したのである。その天皇、最も有名な天皇が「上宮法王」である。「法興」はこの天皇が定めた元号である。上宮天皇は、「法興」元年（590）に即位し、「法興」22年（622）に亡くなった。
(3) この天皇は、大阪府太子町にある、叡福寺・磯長陵に祀られている。命日は2月22日である。法隆寺「釈迦三尊」光背銘に、「二月二一日癸酉王后即世翌日法皇登遐」と記録された「法皇」と同一人物で、日本國天皇だった。
(4) 播磨國風土記
（印南の郡）原の南に作石あり。形、屋の如し。長さ二丈、廣さ一丈五尺、高さもかくの如し。名号を大石といふ。伝えていへらく、聖徳の王の御世、弓削の大連の造れる石なり。
「播磨（兵庫県）」に残る伝承は「聖徳王」と記述している。幸運にも当時の人々の認識がそのまま記されている。「聖徳の王」とは上宮法王は王である。王とは国王の意である。風土記の「聖徳王の御世」とは法興年間である。上宮法王が日本國天皇として在位した法興である。
(5) 「上宮聖徳法王帝説」とは「上宮聖王」に関する伝記である。「帝説」は日本國天皇の記録書である。現在、飛鳥に残る古代遺跡・遺物は「日本國」のものである。